

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2009

課題番号：18530633

研究課題名（和文） 産学協同・高大連携による人材育成プログラムの開発
－成功の要諦・失敗の本質の解明－

研究課題名（英文） Development of Talent Training Programs through
University-Industry Collaboration and University-High School
Collaboration

- Clarifying the Nature of the Failure and the Essence of Success -

研究代表者

百合野 正博（YURINO MASAHIRO）

同志社大学・商学部・教授

研究者番号：20104606

研究分野：会計学・会計監査

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学・人材開発・開発教育

キーワード：教育学・社会系心理学・産学協同・人材育成・プロジェクト型教育

1. 研究計画の概要

(1) 本研究は、教育重視型の産学協同の可能性とその社会的意義を明らかにし、新たな産学協同に対する分析・評価プログラムを開発することを目的としている。

(2) 本研究では、主として次の4本柱を中心として、研究を行ってきた。

① 国内外の事例調査研究 教育重視型の産学連携の取組みについて、国内国外を問わず、さまざまな事例を検索している。この中には、短期海外滞在型教育プロジェクトも含まれている。

② 同志社におけるプロジェクト型教育の実態調査・分析 同志社ローム記念館プロジェクトおよび同志社大学プロジェクト科目に関する調査および分析。

③ 評価基準・分析手法の開発 本研究の特長として、教育学の領域の研究者だけでなく、まったく領域を異にする研究者でありながら、このテーマについて強い関心を有するメンバーが含まれていることが指摘できる。そのメンバーの各専門領域における評価・分析の手法を援用しつつ、異分野間での議論を深めている。

④ 産学連携教育に関する意識調査とその評価 一般の人びとに対する意識調査と、同志社ローム記念館プロジェクトおよび同志社大学プロジェクト科目に係わっている学生・教職員・企業人の意識に関する情報を収集するとともに、それを評価し、一定のまとまりを形作る。

⑤ プログラム成功のための要因分析 最終的には、成功の要諦および失敗の本質を解

明することを目的としているので、産学協同プロジェクト型諸活動における若い人たちの人材育成のコアになる部分を明らかにする。

2. 研究の進捗状況

本研究では、できるだけ多種多様なデータを集めて、それを分析することから開始した。具体的には、次のような調査が含まれる。

(1) 産学連携教育に関する意識調査 企業労働者（322名）を対象にしたアンケート調査

(2) 産学協同の事例検索 教育重視型の産学連携教育（35件）についての、詳細な検討。

(3) プロジェクト型活動の実態調査 同志社ローム記念館プロジェクト（10プロジェクト）を具体的に検討・分析。

(4) 同志社大学プロジェクト科目の実態調査 科目登録学生を対象に、産学協同プロジェクトを通じて生じたと思われる成長や変化の過程について調査・分析。

学生のパーソナリティとしての要因と、プロジェクト型教育や活動に対する動機づけや対人関係能力の変化に焦点を当てながら分析してきている。それと同時に、プロジェクト型教育の実施・評価等に関する問題点やプロジェクト型教育のもたらす教育効果について、実際にプロジェクトに参加している企業担当者や大学の教職員と意見の交換を行ってきた。

その結果、想像をはるかに超える、多種多様な要因が相互に影響を及ぼしていることが明らかとなっていった。

3. 現在までの達成度

③やや遅れている。

(理由)

想像をはるかに超える、多種多様な要因が相互に影響を及ぼしているだろうということは、この研究を開始するにあたって、あらかじめ予見されていたことである。しかしながら、そのレベルは、われわれが当初予想したよりもずっと複雑多岐なものであることが次第に明らかとなってきた。

おそらくは、もっと幅広い領域の研究者が、共通の問題意識を持って取り組みつづけることが必要ではないかと考えている。

4. 今後の研究の推進方策

産学協同、高大連携、は、いずれも大学を中心に据えた用語であり、考え方である。しかしながら、本研究を通して次第に明らかとなりつつある問題点は、実は、大学を中心に据えたものの見方、考え方を改めなければならないのではないかと、新たな方向性である。

言い換えるならば、人材育成のプロセスは、高等教育という仕上げの場だけでは如何ともしがたい状況がすでに生まれているのではないかと、さらに付け加えるならば、成功の要諦も失敗の本質も、実は、大学教育よりもずっと前の段階で、よりはっきり言えば、初等教育から中等教育のレベルで、芽吹き始めているということであり、その芽の大きさ、茎の太さが、はるか未来の果実の大きさに決定的な影響を及ぼす要因となっているのではないだろうかということである。

そのような視点を持ちつつも、最終年度においては、これまでの学校教育との係わりにおいて、大学が人材育成にどのように取り組むべきかを明らかにするという線で研究の取りまとめを行いたい。

そのうえで、大学教育は、初等教育と中等教育の延長線上でしかない、という当然のことでありながら、その当然であるがためにこれまで見落とされがちであった視点を加味して、人材育成プログラムの開発に取り組みたい。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

山田礼子、A Comparative Study of Japanese and US First-year Seminars : Examining Differences and Commonalities, *Research in Higher Education*, No.39, 2008, pp.287-305, 査読有。

山田礼子、学生の情緒的側面の充実と教育成果 — CSSとJCSSの結果分析から —、*大学論集* (広島大学 高等教育センター)、2008、181-198 ページ、査読有。

山田礼子、初年次教育の組織的展開、*初年次教育会誌*、第1巻第1号、2008、65-72 ページ、査読無

田中希穂、プロジェクト活動における動機づけ過程と他者相互関係の関連、*日本心理学会第70回大会発表論文集*、2006、1038 ページ、査読無。

田中希穂、プロジェクト活動とおした動機づけ要因の変化、*日本教育心理学会第48回総会発表論文集*、2006、298 ページ、査読無。

[学会発表] (計 4 件)

田中希穂、プロジェクト型教育における学生の動機づけ的要因と個人特性的要因の関連、*日本教育心理学会第50回総会*、2008.10.31、東京学芸大学。

百合野正博、グローバル化と監査研究 - 景勝・発展・積み残し -、*日本会計研究学会第67回大会*、2008.9.9、立教大学。

百合野正博、大学が提供している流動性の機会と学生の選択との間のディバイドの認識、*日本高等教育学会第10回大会*、2007.5.26、名古屋大学。

田中希穂、The Effects of Autonomy Support and Basic Need Satisfaction in Undergraduate's Project Activity, The 3rd. International Conference on Self-Determination Theory, 2007.5.26 Toronto, Canada.

[図書] (計 1 件)

山田礼子、東信堂、*大学教育を科学する：学生の教育評価の国際比較*、2009、320 ページ。

[その他]

特記すべきこと、なし。